連載

新屋のアスリートたち (14)—後編

サッカー日本代表選手で、主将も務めた 藤島信雄(下)

S51年、モントリオールオリンピック予選でも敗れ、監督が代わり、西ドイツへ2ヵ月もの長期遠征を行ったが、途中で藤島がキャプテンを任された。しかし、釜本の引退もあり、全日本チームはストライカー不在のまま低迷する。藤島を中心に守備面ではそれなりの戦いができたが、点を挙げなければ勝つことはできない。

左腕にキャプテン・マークをつけて

S54年が選手生活の転機となる。ムルデカ大会出発前に左頬を骨折。帰国して迎えた日本リーグの後期初戦で、今度は左膝前の靭帯が切れた。当時膝の靭帯を切って第一線にカムバックした選手はいなかった。チームドクターも「治っても選手は難しい」と言う。ギブスが取れると足が女性のように細くなって、ボールを蹴っても全く飛ばない。

そこから凄まじいリハビリを積み重ねたと思うが、尋ねても静かに笑顔を浮かべるだけだったという。リハビリの間、日本鋼管は2部に陥落していた。

S55年4月、日本リーグ第2節から復帰。左足は元の状態に戻った訳ではなく、藤島は「もう30歳で代表復帰は無理だろう。これからは会社のために全力で戦おう」と気持ちを切り替えていた。藤島の復帰後、日本鋼管は旋風を巻き起こし、JSLカップで優勝。翌56年は2部優勝で1部復帰を決め、57年元日には決勝で読売クラブに勝って天皇杯制覇。

現役時代の最も思い出深い試合はこの元日の天皇杯決勝戦だという。大怪我から復帰し優勝した試合で、サッカー雑誌の表紙にもなった。優勝杯を両手で掲げる藤島の会心の笑顔が、喜びを雄弁に表わしている。

サッカー誌の表紙に

S60年、コーチ兼任となり、出場機会がないまま引退。35歳になっていた。JSLでは昭和46・51・52・53年にベスト11。1部通算200試合に出場し30得点を記録している。

会社の仕事に復帰する選択肢もあったが、サッカーに携わりたいとコーチの勉強を始めた。日本鋼管はサッカーのプロ化に消極的で、H5年のシーズン限りで廃部となった。

現役時代、世界的な名選手たちとの試合も経験した。S50年には「サッカーの皇帝」ベッケンバウアー（西独）と、S52年には「サッカーの王様」ペレ（ブラジル）との対戦である。生涯忘れえぬ体験であろう。

ペレ（ブラジル）と

ベッケンバウワー（西独）と

藤島は会社を辞め、指導者の道へ。神奈川県サッカー協会に所属しながら横須賀高のコーチをし、富山県のYKK監督としてH11年にはJFL昇格を果たした。H18年コバルトーレ女川の監督を務めるなど日本サッカー界の底辺を支える仕事をしてきた。

H18年に発表された「日本代表1970年代ベスト11」でMFは真っ先に藤島が選ばれた。

1970年代のベストイレブンに

選者から「藤島は、最初は相手エースに食らいつくだけのMFだったが、次第に技量を伸ばし、70年代末には守備からゲームメーク、そしてシュートまでこなす近代的なMFに成長した。前史にはいなかった近代的なプレーヤーだ」と絶賛された。

一男一女を授かっていたが、11年前に妻に先立たれ、現在は横浜市で一人住まい。埼玉県の昌平中・高校サッカー部チームディレクターとして指導している。息子・崇之は、当時無名だったこの昌平高校の教諭・サッカー部監督として全国大会ベスト4に導き、一躍名を上げた。当然「父親はあの藤島か!!」と「親子鷹」として、再び脚光を浴びている。

「東北では過疎化が進み、学校単独でチームを作れず、能力がありながらサッカーを諦める子も多い。中にはスポーツそのものを止めてしまう子もいて、これは勿体ない。自分はそういう子どもたちが、ずっとサッカーを楽しんでいける、夢を諦めなくていい環境を作りたい」と語る藤島は、現役時代と変わらず、黙々と走り続けている。新屋のことも忘れてはいない。還暦も古稀も日吉神社でお祓いを受けている。

（のばこやま）

息子・崇之氏と一緒に生徒を指導

《用語解説》
MF（ミッドフィルダー）…サッカーフィールドの中間に位置するポジション。攻守ともに重要な役割を持つ。相手のMFをマークし、相手の攻撃を抑えたり、味方にシュートのアシストパスを送ったり、時にはミドルシュートを打って得点を挙げるなど重要な役割を持つ。